現代ロシア論　第三回 ５・１０

2007年8月7日

23:26

Copyright : Takumin

現代ロシ...

今回のテーマ：　ロシア革命と前回まで述べた政治的伝統との関係。

・前回までに述べてきたロシアの政治的伝統の簡単なまとめ。

1．　君主は専制権力として、対抗する勢力のない状態で振舞ってきた。権力の限定や抑制の必要性は、上層・下層の社会の中で重視されなかった。

2．　貴族層、知識人層はヨーロッパの文化を吸収したが、民衆の生活にはヨーロッパの文物はほとんど浸透せず、深い文化的亀裂が生じていた。

3．　農民は農村共同体を長く維持し続け、基本的に自治の世界を築いていた。そこには古い因習とともに、正義や公正の観念が保持された。

今までは複線。今日はロシア革命との関係について。フランス革命と同じくらい有名な革命。簡単に話しますよ。革命は伝統を打ち壊すもの。革命は、行わなかった国のほうが自由がよく保持されていると書いてある。そしたらラテンアフリカや東南アジアの革命家たちは、「じゃあ俺たちは何をすればいいんだ！？」って言うことになるよね。ロシア革命は多数の人生を変えていった歴史的事件。政治的伝統を大きく変えていった。革命によって新しいものが生まれる。革命の後には政治的伝統はどうなったのか。１億４０００万人のうち７百万の人々が戦争によって死んだ。それに加えて、数百万人が自国を捨ててアメリカ等に逃亡した。それだけ巨大な事件。この革命は社会主義革命であった。ロシア革命を説明するというのは難しいが、資本主義体制→社会主義体制。マルクス・エンゲルス１８４８年に共産なんたらを書いて呼びかけた。ヨーロッパには社会主義者たちはたくさんいる。その社会主義者たちの心の中で響いていたのは、資本主義体制はいずれ崩壊し、社会主義体制が確立するだろうということであった。１９１７年のロシア革命で、レーニンという人物権力を握って、自分たちが行っているのは社会主義革命だと明言。ヨーロッパは社会主義に向かって動き出していると発言。アジアのみならず、世界各国のインテリたちに、新しい時代を作る革命が起こり始めたという認識を植えつけた。

① 大きな事件で人間が死んだりたくさんいなくなったこと。
②革命を主導した人たちが、自分の革命が社会主義革命だと明言して世界を震撼させた。

この二つの点でロシア革命は意味がある。

社会主義体制とは、人による人の支配がまったくない社会、ということ。世界中のインテリたちが感激してロシアを訪問、学ぼうとする。考えれば当然のことだが、革命が起こって今までの政治的伝統を変化させてゆくのだが、抵抗してゆく中で、変えられなかったこともあった。その変えられなかったもの、が重要なんだとさ。

・　1917年の革命家たち(レーニンたち)は、こうした政治的伝統を破壊し、社会主義社会＝人による人の支配が全くない社会　を生み出そうとした。

当時、上層部と下層部の亀裂激しく、国家のまとまりがなかった。戦争しなければならない状況になったときには、その圧力にロシアは耐えられない。するとお互いに責め合う。下層部は、「上層部がきちっとしないから悪い」、上層部は、「下層部が命令に従わないから悪い」、とお互いに責めあう。配給も十分に施されないままであった。１９１７年、ロシア革命で皇帝退去。新たな権力者は、地主の土地を奪って、農民に帰す。どういうことかというと、農民が地主に暴力を振るうようになった。こうしてロシア革命が進行。もう一回権力者の交代が起こり、新たな権力者が出てきた、それがレーニン。

結局何ができたかというと、屈辱的な講和条件を認めて、ドイツとオーストリアハンガリー帝国とかと講和条約を結んでウクライナの大半の領土を失う。農民に土地を与えておいて、都市民の食料を確保するということは両立できない。土地と食料を一遍に両立するのはできない。レーニンとかは都市部を優先して、農民から穀物を取り立てる、そして都市民に配った。革命が一向に進まないこと、農民から取り立てたりするようになったこと。こういったことから激しい内戦になってゆく。

しかし、１⇒　ソヴィエト権力は、自分達が行使する権力は旧来のものと質的に異なるとして、その制限や抑制を図る制度を生み出さなかった。

一般民衆もまた権力を抑制することに何のイメージも持っていなかった。考えもしなかった。権力者たちは、社会主義を実現するためにやっているのだから、自分たちは特別抑制される必要はないとして、三権分立を認めない。他政党も弾圧、権力を与えない。そうして一党国家体制が形成された。ちなみに中国の体制も一党国家体制の変型版

と考えられている。専制君主の権力体制とは大して質的には変わりない。これは、権力者が死ぬか、クーデターが起こらない限り権力者が交代することがないことを意味した。つまり、この点については、政治的伝統が変わらなかったということがいえる。

2⇒　ソヴィエト権力の担い手である革命家集団（ロシア社会民主労働党ボリシェヴィキ、1918年から共産党）は、ヨーロッパの文化に学び、最新の思想であるマルクス主義を受容していた。彼らはロシアの伝統的価値観に生きる農民を啓蒙の対象とみなし、ここに権力と農民の間の深刻な亀裂が生じた。

ヨーロッパの文化を吸収していた貴族たちは亡命したので、一般市民との文化的な亀裂はなくなった。しかし、今度は革命家と民衆との間で亀裂が生まれる。革命家は「社会主義思想」をヨーロッパから学ぶ。資本主義はうまくいかないから社会主義を作ろうと頑張る。しかし民衆からすると何をしようとしているのかまったくわからない。理解できなかった。革命家は、農民＝遅れた人々、
都市と工業こそが新しい社会なのだと考えていた。貴族対民衆という亀裂構造はなくなったが、民衆対革命家という形で新たに発生して、農民からすればこの亀裂構造には何の変化も起こらなかった。

3⇒　少数派であった政治権力は、農民の伝統的価値観を利用した。土地や労働についての農民の意識、農民の集団主義は、ツァーリや貴族、地主と戦う上で革命勢力に都合がよい。しかし、農民に土地を与え、同時に、都市の労働者に食料を供給することは、簡単には両立できなかった。革命政権は、1921年から一時的に農民側に譲歩した。(これを新経済政策、ネップと呼ぶ)。しかし1928年から集団化を強行し、共同体に結束する農民と対決した。

ロシアのような遅れた国では工業化をするには農民から穀物を取り上げ都市民に分け、余ったものを輸出し外貨をゲット、そのお金で工業化に充てる、という方法しかなかった。そう考えている人たちが権力を握ったのだ。しかし農民は農村の共同体を形成していて、独自のルールとか自治とかを長い間やってる。そんな結束を権力者は壊せるはずもなかった。協力して穀物を隠しあったりして、農村はかなりの抵抗をする。１９２１年になってレーニンは譲歩、（ネップ）新体制政策に転換。もう取り上げないから自分で市場に売ってください、そのお金を我々は徴収しそれを工業化に充てますとした。そこまでいったが、これだとやはり工業化できないので、どうするのか。戻ることになる。それが第一次五カ年計画で、農村を集団化。コルホーズ・ソフホーズですね。集団農場化して農村はずたずたに分解。国家に吸収された。１９２８年からそういうことになっちゃう。農民は農村共同体を形成していて自治して、かなりの抵抗で勝っていたのだが、１９２８年に、集団化とかで負けていっちゃう。

「第一次五ヵ年計画期に確立した党と国家の一元的支配体制は、自治組織としての農村共同体の存在とは相容れないものであり、農村末端の共同体＝村社会に固有の統治の機能は、より上部の行政機構へ、最終的には国家へと吸収されていった」。奥田央編『20世紀ロシア農民史』(社会評論社、2006) p. 16

１９１７年の革命はたしかに農村共同体の正義の観念と組んで地主から土地を奪ってともに戦ったが、１８年には都市民を保護して農民から穀物を取り立てることになる。そうすると農村が激しく抵抗、２１年には取り上げないことに。しかし、２８年の五カ年計画で農村を粉砕。という話になる。
こういった、矛盾をはらんだ状態で社会主義体制が確立することになる。１と２の伝統は、３の伝統を破壊されることによって、むしろ強化されることになった。ここまでわかったら、レジュメのハンナさんの文章を読んでほしい。絶対的な体制の後には、やはり絶対的な体制なのだね、みたいな反革命的発言を残してる。じゃあ、革命した人は、革命しなければよかったのか！？みたいな反論をしたくなるけど、現実はこうでしょ？っていう話です。
政治的伝統⇔革命・大改革・戦争
→対立するものではなくて、ある一つの伝統を壊すために、ある伝統がむしろ強化されてしまうということがあるという。

・結局、革命は政治的伝統の何を破壊したか。ハンナ＝アレントの指摘。
「さらに、悲しいかな、たとえ時の権力をめぐる環境がどんなに凶暴なものであれ、革命がこれまで起ったことのないような国々のほうが自由をよく保持していること、そして、革命が勝利したところよりも、革命が敗北した国々のほうに市民的自由がいっそう多く存在していることもわれわれは知っている。」
「実際、革命は、それが打倒する統治形態によって前もって決定されるということくらい当然なことはないように見える。したがって、新しい絶対者たる絶対革命を、それに先行する絶対君主制によって説明し、旧支配者が絶対的であればあるほど、それにとって代わる革命も絶対的となるという結論をくだすことくらい真実らしく思われることはない」。(『革命について』ちくま文庫)

貼り付け元 <file:///H:¥授業ノート2年生¥現代ロシア論¥現代ロシア論5・10.doc>